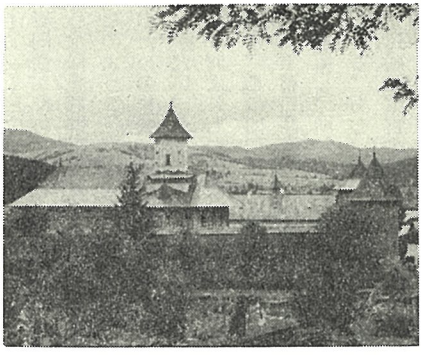
北モルドヴァの壁画



竹中正夫

ルーマニア東北部のなだらかなみどりの丘陵の谷あいに点在する教会堂の壁画は、中世から伝わる独特な宗教芸術の宝庫として、かねてから一度は訪ねてみたいと思っていた。数年前に研究室で、『モルドヴァの教会壁画』（恒文社、一九八〇年）を手にしたときその美くしさに魅了されるとともに、著者であるブカレスト美術史研究所のドラグーツ所長のことばは、探訪のおもいをそそるに充分であった。

驚嘆し、賞讃の言葉すら見出せずに立ちつくしている人びとの心を、これ以上惹きつける建造物がどこにあろうか。壁面を覆う、祭りの晴着にも似た豊かな彩り。脆い金箔は剝落もせずに、何世紀の間風雪に耐えてきた。このような例が、いったい、世界のどこの国にあったであろうか。

ハーバード大学における講義も終り、卒業式の行事にも一通り出席し、一〇ヶ月にわたって住みなれたボストンを去ってルーマニアにむかった。空港には、ニーバー教授夫妻、世界宗教研究所のカーマン所長夫妻も送って下さり、別れを惜しんでの旅立ちであった。

七月七日ルーマニアの首都ブカレストに着いたときは、出稼ぎにいっていた人びとが、帰省するシーズンで、空港は、大変な混雑であった。税関のところには、長蛇の列がしかれてみな幸抱づよく待っていた。

ルーマニアは一九四七年から社会主義国家となり、共産党の指導者が大統領となっている国であるが、キリスト教は盛んで、人口約二、〇〇〇万の中、八割はキリスト教徒で、大部分は東方正教会に属している。私たちは、東方正教会のゲストとして暖かく迎えられ、ブカレストの宿舎に案内された。

翌八日早朝に、ブカレスト大学のA・チョーム教授の案内で、飛行機でスチャヴァに赴いた。ブカレストから約五〇〇キロ北にあり、中世のモルドヴァ公国の主要都市で、現在では、スチャヴァ県の県庁の所在地である。スチャヴァには、一五一四年から一五二二年に建てられた聖ゲォルグ教会堂がある。外部の壁画の色は可成りあせてしまっているが、瓦の装飾は最近修復が成ってあざやかな模様をした屋根が高く聳えていた。四方に壁をめぐらされた構内に修道院があり、私共夫

婦は修道院の賓客として、そこを根城として、周辺の教会・修道院を探訪する五日間をすごした。

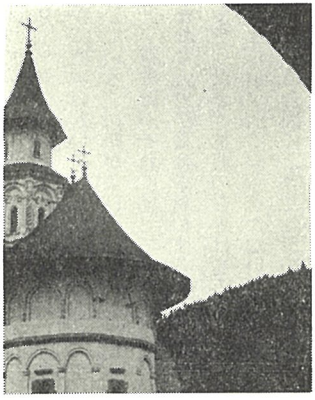
北モルドヴァ地方は、みどりのなだらかな丘陵の谷あいに村々が散在している農村地帯である。村々をむすぶポプラ並木道の、主要な交通機関は馬車である。自動車をみることはほとんど稀であり、自転車すらもあまりみかけない。麦の収穫がすんで、到るところに干草の山がつまれており、放牧してある牛の群が道路をゆっくり横切るあたり、のどかな田園の情趣がただよっていた。

スチャヴィタの修道院にて

この地方一帯に芸術的な香り豊かな会堂や修道院が出来るようになったのには、長い歴史がある。もともとモルドヴァの人びとは装飾文模に深い関心をもって、父から子に子から孫へと、その手法を伝えていた。現在でも、この地方の民家を訪ねると、色彩豊かな陶器、鮮明なデザインのカーテンや敷物が目につく。伝統的な装飾美学と、ビザンチンの東方正教会で用いられている図像配置の形態が見事な出あいをなして開花したように思われた。イコンを偶像化のおそれあるものとして否定した西の教会とちがって、東方正教会は、バシリウスが「絵画は文字を知らない人びとのための一冊の本のようでなければならない」とのべたように、キリスト教の真理を反映し、伝達するために用いられていった。

この地方の教会堂は、シュテファン大公（在位一五五七―一六〇七）の時代につくられたものである。彼の時代は戦乱の世であり、トルコ人、タタール人などとの戦いがたびたびあった。彼が画匠に画かせた絵の中には、『聖堂奉献図』や『聖戦士の騎馬行列』の絵がある。前者においては、自分とマリア公妃が会堂の模型を捧げているところをえがき、後者においては、ゲォルギウス、ドミトリウスなどの一連のビザンチンの戦士をえがいている。こういうところは、いかにもキリスト教とこの世の権力との交錯を如実に反映している。

さて、会堂の内外の壁画や装飾はそれぞれの会堂によって多少趣きがちがっている。たとえば、ヴォロネッツの会堂の色彩は、鮮かな青であり、ドラゴミナの会堂は壁画よりも、彫刻による装飾に重点をおいて、コーカサス地方を起源とする縄形の帯状装飾をめぐらすなどそれぞれ異っている。



ドラゴミナ聖堂

受胎告知（モルトヴィタ聖堂）

それらの会堂には特色はあるが、基本的にはいくつかの共通点から成っている。会堂は石造りで三葉型（アプシス・プラン）によって建てられ、天井はビザンチンのドームを用い、窓わくには、ゴシック建築の装飾をとりいれている。会堂内部には、イエスの生涯がえがかれ、外部の壁面には、最後の審判や、コンスタンチノープルの包囲の絵などがえがかれている。このコンスタンチノープルの包囲の絵は、マリアの生涯の一連作であるが、とくに大きくえがかれている。紀元六二六年にコンスタンチノープルがペルシャ軍によって包囲された。そのとき、マリアの恵みによって奇跡的に救われたという伝説が再現されている。いくたびか、外国の軍勢の侵入をうけたこの地方の民衆たちの心情がそこにあらわれているように思った。興味深いことには、外壁の画の中には、プラトー、アリストテレス、ピタゴラスなどギリシャの哲学者たちを、キリスト教の教父たちと並べて画いていることである。日本では、孔子や孟子の絵を会堂にえがいたりはしないが、ここでは、調和してうけいれられているのはどうしたことかと思った。

七月一一日は日曜日であった。朝から小雨がけぶっていたが、三々五々と近隣から人びとは続々と会堂に集ってきた。孫たちの手をひいてやってくる老人たち、姑をいたわるようにしてつきそってくる嫁たち、頭に布をかぶった中年の婦人たち、美しい刺繍をしたコートを着た男たちなど、老若男女の信徒たちで会堂は一杯であった。会堂の到るところには信徒たちのもつ、ローソクの光と、司祭が弧をえがいてまくようにたてるお香の薫りが一杯であった。会堂に入ったとき美しい合唱の声がこだましてきた。あまりに美しいので、これは、どこか有名な合唱団の演奏をテープで流しているのかと思った。中に入ってローソクの焔の間からよくみると、正面の左手に聖歌隊がいて、二〇名位で混声の合唱をしている。司祭がよびかけのことばをうたうと、聖歌隊がそれに応じて讃美をうたい、ときおり会衆が讃詠を唱和する。みな立ったままでうたう。礼典のことばをみんなおぼえているのか、別に何ももたないでも、聖歌隊の指揮者の合図によって会衆の大合唱がつづく。前日、修道院の院長に、共産主義の社会になってキリスト教は減退しているのではないかとたずねた。彼は、「たしかに試練はあるが、わたしたちの教会にこの礼典が存続する限り教会は衰えない」といっていたことを想起した。

礼典はクライマックスに達し、中央の聖障が開かれ、司祭が聖体を迎えた。東方から光が会堂にさし、周囲の壁画がさらに浮びあがって来た。この礼典は、幾多の迫害や、戦乱や包囲の中にも、この民衆たちに生きる希望を与えてきた力であると痛感させられた。

礼拝を終えて信徒たちは、又丘陵にそった小道を歩いてそれぞれの村に帰ってゆく。やや距って、この会堂をみるとき、その周囲の

風情にふさわしくあると思った。日本では借景ということがいわれて、建物や庭が周囲の自然をとりいれることに意を用いているが、ここでは借堂といいたい位に、自然がこの教会堂を迎えて調和の美を形成しているかに思えた。四季のおりおりの装いに応じてこの会堂が楚々と立っている姿を心にうかべてみた。雑木林の葉がおち幹だけがそそりたって野も山も雪におおわれる冬の日。やわらかい陽光をうけて黄色いフォーセシヤの咲きはじめる春の日、そして周囲のなだらかな丘陵のみどりが色濃く夏の太陽にはえるとき、さらに、そびえたつポプラの並木の葉が金色に変る秋の日にも、これらの会堂の壁面の色彩と自然との調和は、それぞれ独自な光を投影するにちがいない。

幾百年の風雪に耐えながら、これらの会堂は豊かな色彩のマントをすっぽりかむって、民衆の間に生きつづけてきたのである。再会の日のままならぬを覚えつつ、この秘境に別れをつげた。

（大学神学部教授）

『同志社百年史』について

「通史編」（全二巻）

同志社百年の歴史を五つに時代区分し、次の五部から成っている。

第一部　創業と成育（明治前半期）
第二部　キリスト教教育の受難（明治後半期）
第三部　大学への道（大正期）
第四部　戦時下の学府（昭和前半期）
第五部　再生と発展（昭和後半期）

上野直蔵総長は「通史編」の「序」で、「同志社における徳育の基礎であるキリスト教は、それがキリスト教たるがゆえに、少なくとも一九四五年にいたるまで国粋的権威筋から胡乱な目でみられ、疑問視され、敵視されてきた。（中略）同志社を護るための先人たちのすさまじいまでの攻防は、まさに一つのドラマであり、読むものをして緊張と畏怖の念を起こさせるであろう。この書は同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分をも隠すことなく記している。」と述べておられる。ラットランドのグレイス教会における新島襄の、学校設立に関する訴えを起点とする「通史編」は、確かに、キリスト教主義をめぐる同志社の攻防を軸に展開されているといえよう。もちろん同志社の諸制度や諸学校の変遷、そこで生きた学生生徒を含む諸先輩の動向などは、それぞれ独自に、読者に訴えるものをもつはずである。

「資料編」（全二巻）

「通史編」の叙述に用いられた基礎資料およびそれに関連のあるものを中心に編纂されている。同志社開業関係にはじまり一九七五年度までの主要な資料を収録、原資料による同志社百年史といってよく、それ自体自立性をもっている。収録資料三五〇点、従来活字になっていなかったもの、すなわち未公開資料が数多く含まれており、読者は同志社史の新しい一面を見出すであろう。研究者の期待にも応えうるものである。詳しい同志社年表を添えてある。

「通史編」約一七〇〇ページ。
掲載写真　三二五点。
頒価・六、〇〇〇円
送料不要の場合　五、四〇〇円
「資料編」約二〇〇〇ページ。
頒価・一二、〇〇〇円
送料不用の場合　一〇、八〇〇円
発行・学校法人同志社
取扱い・同志社収益事業課
（電〇七五―二五一―三〇三八）